

大新书局授权

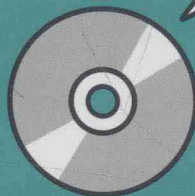
新試験対応

新日能测验 全真模拟题集

N3

国书日本語学校・青山丰・青山美佳 编

CDつき



- ❖ 新日语能力测验 N3 全真模拟题
- ❖ 对应全新“语言知识（文字、词汇）”、“语言知识（语法）・读解”和“听解”三大考试科目
- ❖ 最佳考前冲刺辅助用书
- ❖ 附中日文“新日语能力测验”介绍

南开大学出版社
天津电子出版社

新試験対応

新日能测验 全真模拟题集

N3

国书日本語学校・青山丰・青山美佳 编

南开大学出版社
天津电子出版社

本著作物由国书刊行会、大新书局授权出版

天津市版权局著作权合同登记号：图字 02-2010-70

图书在版编目 (CIP) 数据

新日能测验全真模拟题集. N3 / (日) 青山丰, (日)

青山美佳编. —天津：南开大学出版社，2010.6

ISBN 978-7-310-03432-1

I. ①新… II. ①青… ②青… III. ①日语 - 水平考
试 - 习题 IV. ①H369.6

中国版本图书馆CIP数据核字 (2010) 第101804号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社、天津电子出版社出版发行

出版人：肖占鹏
于志坚

地址：天津市南开区卫津路94号 邮政编码：300071

天津市南开区长实道19号 邮政编码：300191

营销部电话：(022) 23678808 营销部传真：(022) 23678809

*

厦门市金凯龙印刷有限公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2010年6月第1版 2010年6月第1次印刷

787×1092 毫米 16开本 7.25印张 108.75千字

定价：24.00元 (含1张光盘)

如遇图书印装质量问题，请与本社营销部联系调换，电话：(022) 23678808

まえがき

全世界で56万人（2008年）が受験する日本語能力試験が2010年7月、新しい試験に生まれ変わります。

「新しい日本語能力試験」は、日本語を学んだり使ったりする幅広い人を対象として、その日本語能力を測定する試験であることは、旧試験と変わりませんが、日本語の知識だけに偏るのではなく、それを実際に使ってコミュニケーションできる能力を測ることを重視するものになります。問題内容も、これを反映して大きく変わります。

この予想問題集は、2009年8月に改訂内容をまとめ公表された「新しい『日本語能力試験』ガイドブック」と「新しい『日本語能力試験』問題例集」をもとに、どのような問題が考えられるのか、試みに作成したものです。限られた例題から予想して作成したため、必ずこの問題が出題される、というものではありませんが、まずはいろいろな形式の問題に当たっておくのも無駄にはならないのではないか、という思いで質問しました。すでに第1回試験に向けて勉強を始めている学習者の方もあると思います。少しでも、その準備に役立てば幸いです。

* * *

本書は3部構成になっており、第1部は「言語知識（文字・語彙）」、第2部は「言語知識（文法）・読解」、第3部は「聴解」です。「聴解」では、「ガイドブック」では問題の指示文も音声が入っていますが、本書では省略しています。

2010年 2月

編著者一同

目次

まえがき

新しい日本語能力試験に関して	5
----------------	---

第1部 言語知識（文字・語彙）	25
-----------------	----

- 問題1 漢字読み
- 問題2 表記
- 問題3 文脈規定
- 問題4 言い換え類義
- 問題5 用法

第2部 言語知識（文法）・読解	39
-----------------	----

- 問題1 文の文法1：文法形式の判断
- 問題2 文の文法2：文の組み立て
- 問題3 文章の文法
- 問題4 内容理解：短文
- 問題5 内容理解：中文
- 問題6 内容理解：長文
- 問題7 情報検索

第3部 聴解	63
--------	----

- 問題1 課題理解
- 問題2 ポイント理解
- 問題3 概要理解
- 問題4 発話表現
- 問題5 即時応答

解答	87
----	----

聴解問題スクリプト	91
-----------	----

新しい日本語能力試験に関して

新しい日本語能力試験とは

2010年7月から、「新しい日本語能力試験」(以下、新試験)が実施されます。新試験はこれまでと同様、原則として日本語を母語としない人を対象に、日本語の能力を測定し認定することを目的としています。

2009年までの日本語能力試験(以下、旧試験)では、言語知識を問う問題が配点の半分を占めていましたが、新試験は、従来の文法や文字・語彙などの言語知識とともに、それを実際に運用してコミュニケーションをし、課題を遂行する能力があるかどうか、ということ測る試験に変わります。

2009年7月に、主催団体である独立行政法人国際交流基金と財団法人日本国際教育支援協会から、『新しい「日本語能力試験」ガイドブック』(以下、ガイドブック)が公表されました。改定のポイント、新しい試験の概要などが掲載されています。そのガイドブックをもとに、新試験がどのように変わるのか、N1～N3を中心に見ていきましょう。大きく変わるポイントとして、次の5点が挙げられます。

1 レベルが4段階から5段階になる

旧試験は4段階(1級～4級)に分かれていますが、これが新試験では5段階(N1～N5)になります。旧試験の2級と3級の間に「N3」というレベルが新しく設けられます。これは「3級に合格したが、なかなか2級に合格できない」という声が多く、それに対応して作られた、ということです。

旧試験と新試験のレベル対応は以下の通りです。

N1→旧試験の1級よりやや高めのレベル(合格ラインは旧試験とほぼ同じ)。

N2→旧試験の2級とほぼ同じレベル。

N3→新設レベル。旧試験の2級と3級の間のレベル。

N4→旧試験の3級とほぼ同じレベル。

N5→旧試験の4級とほぼ同じレベル。

2 試験科目と試験時間が変わる

試験科目が以下のように変わります。

N1とN2は、「言語知識(文字・語彙・文法)・読解」と「聴解」の2科目。

N3、N4、N5は、「言語知識(文字・語彙)」「言語知識(文法)・読解」「聴解」の3科目。

試験時間はN1では「言語知識・読解」が110分、「聴解」が60分。N2では「言語知識・読解」が105分、「聴解」が50分。N3では「言語知識（文字・語彙）」が30分、「言語知識（文法）・読解」が70分、「聴解」が40分です。

N4は「言語知識（文字・語彙）」30分、「言語知識（文法）・読解」60分、「聴解」35分、N5は「言語知識（文字・語彙）」25分、「言語知識（文法）・読解」50分、「聴解」30分となります。

3 合否判定は、総合得点と得点区分の基準点によって行われる

旧試験では、総合得点で合否が判定されていましたが、新試験では、総合得点と各得点区分の基準点の2つで合否判定が行われます。基準点に達していない得点区分が1つでもあると、不合格になります。得点区分に基準点を設けたのは、学習者の日本語能力を総合的に判断するため、ということです。

得点区分は、N1、N2、N3の場合、「言語知識（文字・語彙・文法）」、「読解」「聴解」の3区分になり、各区分の得点の範囲は0～60、総合得点の範囲は0～180です。

N1、N2では、試験科目の「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」が得点区分の「言語知識（文字・語彙・文法）」と「読解」にあたり、「聴解」が「聴解」にあたります。

N3では試験科目の「言語知識（文字・語彙）」が得点区分の「言語知識（文字・語彙・文法）」、「言語知識（文法）・読解」が得点区分の「読解」、「聴解」が「聴解」にあたります。

N1、N2、N3では、学習段階の特徴から、「言語知識」と「読解」は別の能力として測定されます。言語知識を運用して課題を遂行する能力は、読解、そして聴解で、より現実に近い形で発揮されるため、それを試験問題に反映させやすくするためです。現実に即したコミュニケーション力をバランスよく付ける学習が必要になります。

ただし、基準点が何点になるかについては2010年に決定する、ということです。

4 得点等化が行われる

異なる時期に実施される試験は、出題問題が違うため、試験の難易度にどうしても変動が生じます。新試験では、異なる時期に試験を受けても、試験の難易度にかかわらず、実力が同じ場合は同じ得点になるよう「等化」が行われます。異なる時期に受けた試験の結果を共通の尺度上の得点で表し、比較できるようにする、ということです。

5 「日本語能力試験Can-do リスト」が提供される

試験に合格しても、実際に日本語を使ってどんなことができるのかはわかりません。そこで、新試験では、レベルごとに、そのレベルに合格した人は日本語を使って具体的にどんなことができると考えているかという例を示したリスト（Can-do リスト）が提供される予定です。例えば「書く：感謝や謝罪、感情を伝える手紙やメールが書ける」「話す：アルバイトや仕事の面接などで、希望や経験を詳しく述べることができる」といった形で表されます。

ただし、このリストはまだ公表されておらず、2010年度中に提供される、とされています。

◆ 新試験の内容について

ここでは、新試験の構成について、見てみましょう。N3は以下の通りです。

● 言語知識

文字・語彙

漢字読み8問 表記6問 文脈規定11問 言い換え類義5問 用法5問

● 言語知識・読解

文法

文の文法1（文法形式の判断）13問 文の文法2（文の組み立て）5問

文章の文法 5問

読解

内容理解（短文）4問 内容理解（中文）6問 内容理解（長文）4問

情報検索2問

● 聴解

課題理解6問 ポイント理解6問 概要理解3問 発話表現4問 即時応答9問

◆ 新試験で測定される知識・能力はどのようなものか

冒頭にも書きましたが、新試験は、「文法や文字・語彙などの言語知識とともに、それを運用して実際に課題を遂行するコミュニケーション能力があるかどうか」を測る試験だとされています。

では、ここでいう「課題」とは、具体的にはどのようなことを指しているのでしょうか。ガイドブックによると、新試験では、学習者が現在または将来、日本語を使うと予想される状況を「目標言語使用領域（以下、領域）」と設定し、この領域で遂行する頻度が高いと考えられる「目標言語使用課題（以下、課題）」を選んで出題する、とされています。また、課題の課せられる「領域」は、旧試験の応募者の所属や受験目的などのアンケート結果をもとに、「学校」「就業」「生活」の3つを手がかりに推測する、ということです。

つまり、各領域の特徴を持った幅広い問題が出題されるので、レベルによって比重は異なるものの、偏りなく、さまざまな場面で使われる日本語を身につけておくことが求められるといえるでしょう。

それでは、その課題がどのような形で出題されるのか、以下、具体的に試験科目の分類にしたがって見ていきましょう。

1 言語知識（文字・語彙）

ガイドブックでは、「文字・語彙」の知識は、「どのぐらいの数の語を知っているか」「ある語についてどのぐらい詳しく知っているか」という2つの観点からとらえられる、と書かれています。

「ある語についてどのぐらい詳しく知っているか」は「語の形式」「意味」「用法」の3要素から成り立っていると、記載されています。旧試験の「文字・語彙」では、「認定基準」に示されている語数を習得していることを前提に、この3要素を測定する問題が出題されていました。新試験でも同様に、この3要素を測定する試験になるということです。

「文字・語彙」は、6つの大問、「漢字読み」「表記」「語形成」「文脈規定」「言い換え類義」「用法」が設けられます。課題を遂行するための言語コミュニケーション能力を支える言語知識を、語の形式、意味、用法の3面から測定します。

「語の形式に関する知識を測る問題」

「漢字読み」「表記」「語形成」の3つの大問が設けられます。「漢字読み」は漢字で書かれた語の読み方を問う問題、「表記」はひらがなで書かれた語の漢字表記やカタカナ表記（N5のみ）を問う問題、そして「語形成」は派生語や複合語の知識を問う問題です。語形成はN2だけで設定されている問題ですが、N1、N3でも、ほかの問題の中で問わ

れる場合もあるということです。なお、N1では「語形成」とともに「表記」の大問も出題されません。

「語の意味に関する知識を測る問題」

「文脈規定」「言い換え類義」の2つの大問が設けられます。「文脈規定」は、文中に1つ空欄が設けられ、そこに入るのに最もふさわしい語を4つの選択枝（注）から選ぶという問題です。「言い換え類義」は、出題される語を言い換えた場合、一番意味が近い語や表現を4つの選択枝から選ぶ問題です。「文脈規定」と「言い換え類義」は、N1～N5すべてのレベルで出題されます。

注：本書では、ガイドブックにならない、「選択肢」ではなく「選択枝」を使います。

「語の用法に関する知識を測る問題」

「用法」という大問が1つ設けられます。語が文の中で、どのように使われるのが正しいのか、4つの選択枝から選びます。品詞やその語がどういう語と一緒に使われるのか、などの観点から、語の用法に関する知識を問う問題です。N1～N4で出題されます。

2 言語知識（文法）

ガイドブックでは、「文法」の知識は、「文法形式とその意味用法に関する知識」と「テキスト性に関する知識」の2つの観点からとらえる、と書かれています。

文を作る場合、語だけを並べても意味の通じる文にはなりません。語を活用させたり助詞を適宜使ったりして、語と語が自然に結びつくようにする必要があります。また、文を並べただけでも、ひとまとまりの意味を持った文章にはなりません。まとまった文章にするためには、適宜接続詞を使ったり、視点を統一するといった知識も必要です。これらを測るのが文法の問題です。

大問は、「文の文法1（文法形式の判断）」「文の文法2（文の組み立て）」「文章の文法」の3つが設定されます。すべてのレベルで出題されます。

「文法形式とその意味用法に関する知識を測る問題」

「文の文法1（文法形式の判断）」「文の文法2（文の組み立て）」という2つの大問が設けられます。

「文の文法1（文法形式の判断）」は、「文の内容に合った文法形式かどうかを判断す

ることができるか」を問う問題です。問題の形式は、一文に空欄を設け、そこに当てはまるものとしてふさわしいものを4つの選択枝から選ぶ、というものです。

「文の文法2（文の組み立て）」は、「統語的に正しく、かつ意味がある文を組み立てることができるか」を問う問題です。問題形式は、一文の中で、4つの選択枝で示された語を並べ替えて、正しい順番にしたときに、指定された位置に当てはまる語を答える、というものです。

「テキスト性に関する知識を測る問題」

「文章の文法」という大問が設けられます。「文章の流れに合った文かどうかを判断することができるか」を問う問題です。問題形式は、あるまとまった文章に空欄を設け、そこにふさわしい語や表現を4つの選択枝から選ぶ、というものです。

3 読解

問題全体の構成において、読解はN1～N3レベルでは、その比率が旧試験よりも高くなります。ガイドブックによると、読解は「どのようなテキストから」「どのように情報を得るか」という2つの観点から課題を設定する、とされています。

出題されるテキストのテーマや内容はさまざまで、学習に関するもの、現実の生活で目にふれる実用的なもの、仕事に関するもの、などが扱われます。テキストの種類としては、説明文、意見文、評論やエッセイ、日常生活で目にする連絡や案内、仕事で使われる文書などが挙げられます。長さはレベルに応じて、短文、中文、長文の区分けがされるということです。

ガイドブックによると、どのように情報を得るかは、次の4つの読み方のタイプを元に問題を設定し、そのうちの1つの読み方、あるいは複数の読み方を求める問題が出題されるということです。

- A 全体を迅速に読む
- B 部分を迅速に読む
- C 全体を注意深く読む
- D 部分を注意深く読む

大問はレベルによって異なります。

「テキストの内容（部分）を的確に理解する問題」

「内容理解」という大問で、全レベルで出題されます。ガイドブックによると、「言語知識を利用してテキストの細かい部分を注意深く読んだ的確に理解できるかどうかを重視」した問題だということです。テキストに書かれている事実関係、理由や原因の把握などを問う問題が出題されます。Dの「部分を注意深く読む」読み方を求める問題です。

「テキストの内容（より広い部分・全体）を的確に理解する問題」

これも「内容理解」という大問で、N1～N3のレベルで出題されます。ガイドブックでは、「テキスト全体像を的確に把握し、大意を取ったり、キーワードを押さえたり、どのような論理で展開しているかをとらえたりする」といった能力を測る問題とされています。読み方のAとC「全体を迅速に／注意深く読む」読み方を求める問題です。

またN1、N2では、「主張理解」という大問があり、論説文などを読み、「テキスト全体として伝えようとしている主張・意見を読み取る」ことができるかどうかを問う問題も出題されます。

「関連がある複数のテキストを比較したり統合したりする問題」

「統合理解」という大問で、N1、N2レベルで出題されます。ガイドブックによると「同じ話題について違う立場から書かれた2つのテキストについて、その違いや同じところが理解できるか」を問うとされています。読み方のAとD「全体を迅速に／部分を注意深く読む」読み方を求める問題です。

「お知らせ、パンフレットなどから必要な情報を検索する問題」

「情報検索」という大問で、全レベルで出題されます。ガイドブックには「テキストの中から目的や課題に合わせて必要な情報を採り出すことに重点を置いた」問題と書かれています。読み方のAとB「全体を／部分を迅速に読む」読み方を求める問題です。

4 聴解

今回の改訂で、聴解は大きく変わります。旧試験より問題数が増え、試験全体における聴解の比重は重くなります。旧試験では絵のある問題Ⅰと選択枝が音声で示される問題Ⅱに分かれていましたが、新試験ではどんな力を測るか、その内容によって大

きく2つの問題に分かれています。1つは「内容が理解できるかどうかを問う問題」、もう1つは「即時的な処理ができるかどうかを問う問題」の2つです。

内容が理解できるかどうかを問う問題は、「課題理解」「ポイント理解」「概要理解」「統合理解」の4つが出題されます。また即時的な処理ができるかどうかを問うものとしては「即時応答」「発話表現」という問題が出題されますが、レベルによって出題される問題が違います。

新試験は、現実のコミュニケーションに必要な聴解能力があるかどうかを測るため、問題はより現実の課題に近いものにする、とガイドブックではうたわれています。現実のコミュニケーションにおいては、聞くべきポイントを絞って聞いたり、推測やメモをとりながら聞くということもあります。そういった力も試される試験になる、と言えるでしょう。また、イラストのある問題も出題されますが、これまでと違い、できるだけ実際の生活で見るようなものがテーマとして取り上げられるということです。

以下、問題ごとに詳しく見ていきましょう。

「内容が理解できるかどうかを問う問題」

①課題理解

ガイドブックには、「ある場面で、具体的な課題の解決に必要な情報を聞き取り、適切な行動が選択できるかどうかを問う問題」と書かれています。場面設定と質問が音声で示された後、指示や助言などを行っている会話を聞いて、次にどのような行動をとるのがふさわしいか、選択枝から選ぶ、という形式です。選択枝は、文字で示される問題とイラストで示される問題があります。イラストはできるだけ、現実の生活で見るような形で示されます。「課題理解」は全レベルで出題されます。

質問形式は、ガイドブックの例題では、「女の人はこの後、何をしなければなりませんか (N1)」「男の人は箱に何を入れますか (N2)」「女の人は、明日、何時までにホテルを出ますか (N3)」など。この問題集では、こうした問題に加え、話し合いながら自分の担当すべきことを把握する問題、やるべき順番を把握する問題、してはいけないことを把握する問題なども作成しました。また、難易度は高いですがN1では、複数のやるべきことを把握する問題も作成しました。

②ポイント理解

ガイドブックには「内容のポイントを絞って聞くことができるかどうかを問う問題」と書かれています。場面設定とあらかじめ聞き取らなければならないポイントが示され、

問題が流れる前に、問題用紙に書かれている選択枝を読む時間が設けられます。ガイドブックによると、「N1、N2、N3のレベルでは、話し手の心情や出来事の原因などが理解できるかどうか、N4、N5レベルでは、日程・場所などの具体的な情報が理解できるかどうか」を主に問う問題が出題されるということです。

質問形式は、ガイドブックの例題では、「この男の人は先生がどうして怒ったと言っていますか (N1)」「女の子はどうして学校へ行きたくないのですか (N2)」「男の人が自分で料理をしないのはどうしてですか (N3)」など。この問題集でも、これを踏まえて、出来事の原因、人の行動の背景にある気持ちを探る問題を主に作成しました。

③ 概要理解

ガイドブックには「テキスト全体から話者の意図や主張などを理解できるかどうかを問う問題」と書かれています。「課題理解」や「ポイント理解」の問題と違って、音声テキストが流れる前に、「大学の先生が話しています (N1)」「ある電気店で店員が話しています (N2)」などと状況説明が示されるだけで、質問文は先に示されません。音声テキストを聞きながらポイントと思われるところをメモしたり、話が向かう先を推測したり、整理したりしながら聞くという必要があるでしょう。高度な聞く能力が必要とされるため、N1～N3で出題される問題です。

ガイドブックの例題を見ると、選挙演説や大学の講義 (N1)、ある調査結果の説明や物の特徴の説明 (N2)、友人同士の会話 (N3) などが出題されています。上のレベルほどかたい内容が多く、選択枝は音声テキストの中の言葉を別の言葉に言い換えたり、全体をまとめると何と言うかを示す表現になっていたりするものが多いようです。この問題集でも、演説や講演、友人との会話など、できるだけ幅広い話題を、レベルにふさわしいと思われる形で取り入れて問題を作成しました。

④ 統合理解

ガイドブックには「内容がより複雑で情報量の多いテキストについて、内容の理解を問う問題」と書かれています。例えば3人の会話、2種類の音声テキストを聞く問題などが含まれる、とされており、複数の情報を統合・比較・整理しながら音声テキストを聞くといった高度な能力が必要とされるため、出題されるのはN1、N2レベルだけです。

例題を見ると、「家族3人 (父、母、息子) が、父親のタバコについて話しています (N2)」という問題では、3人の会話を聞いた後、「お父さんはなぜタバコを吸わないことにし

ましたか」という質問がなされます。選択枝は音声で流れ、質問は1つです。

また、N1の例題は、ある店員がジュースの説明をしている長めの音声テキストが流れた後、それを聞いた2人の会話が流れるという形式です。それらの音声テキストが流れた後に2つの質問がなされます。答えは、問題用紙に文字で記されている4つの選択枝から選ぶようになっています。2つの音声テキストで言われている情報をメモを取りながら聞き、さらに頭の中でそれらを比較したり整理したりして、答えを探さなくてはなりません。なお、ガイドブックには、注として「このほかのタイプの問題も出題されることがあります。」と書かれていますので、これ以外のタイプの問題が出題される可能性もあると考えておいたほうがよいでしょう。

「即時的な処理ができるかどうかを問う問題」

⑤ 即時応答

現実のコミュニケーションでは、一方的に聞いて内容を理解するだけではなく、相手の発話に対してどのように対応したらいいのか、即座に判断する能力が求められます。その能力を測る問題の1つが、この「即時応答」です。これは新試験で新しく設けられた出題形式です。ガイドブックには「相手の発話にどのように応答するのがふさわしいのかを即時に判断できるかどうかを問う」問題と書かれており、N1～N5まで、全レベルで出題されます。

出題形式は、音声で、短い発話とそれに対する応答が示されます。短い問かけがあった後、3つの選択枝が次々と読まれ、その中から最もふさわしい応答を選ぶ、というものです。例題を見ると、「お客さんからの苦情が多くて仕事にならなかったよ。(N1)」とほぼやく同僚に対してどう答えるか、「今日ちょっと、残って仕事してってもらえない？ (N2)」という依頼を受けてどう答えるか、といった問題が出題されています。また「佐藤さんって、今日お休みだったっけ？ (N2)」と状況を尋ねたり、「わたし、試験勉強、あまりやってないんだ……今から、頑張らなきゃ (N3)」と言っている友達に対する励まし、などの問題が見られます。これらを踏まえて、この問題集では、相手からの依頼、謝罪、勧誘、断り、確認、注意、賞賛などにどう答えるか、スピーチ・レベル、敬語、口語的な表現、倒置の形などの観点も入れて問題を作成しました。

⑥ 発話表現

ガイドブックには、「場面や状況にふさわしい発話を即時に判断できるかを問う」問題と書かれています。挨拶や依頼、許可求めなど、よく日常で使われる表現を主に扱い、

N3、N4、N5のレベルで出題されます。

場面設定と状況は、イラストと音声による状況説明で示されます。場面設定にふさわしい発話はどれか、「何と言いますか」という質問文に続き、3つの選択枝が読み上げられるので、その中から答えを選びます。

最後に

新試験において、ガイドブックで何度も強調されているのは「文字・語彙、文法とといった言語知識とともに、それを実際に使ってコミュニケーション上の課題を遂行する能力を測る」ということです。また、総合得点だけで合否が判定されていた旧試験に比べ、新試験は言語知識、読解、聴解の3つの力が揃わないと合格することが難しくなります。こうしたことから、基礎力として文字や語彙、文法項目を覚えることも大切ですが、丸暗記ではなく、それらを使って何ができるか、を意識して試験対策をしていく必要があるでしょう。

本書の問題は、ガイドブックと例題をもとに、そこから読み取れるものから予想して作ったものです。本書で取り上げた語彙や文法などの内容が必ず出題されるわけではありませんが、新しい試験がどのようなものか、出題形式や傾向をつかんでもらえるように構成しました。新試験が実施された後に、本書の内容もあわせて改訂していく予定です。